息子の縁談

林房雄

房雄

息子の縁談

新潮社版

息子の縁談

昭和二十九年十一月三十日　發行
昭和三十年六月十五日　四刷

定價　貳百五拾圓
地方賣價　貳百六拾圓

著者　林房雄

發行者　東京都新宿區矢來町七一　佐藤義夫

印刷者　東京都文京區柳町二六　山元正宜

發行所　東京都新宿區矢來町七一　株式會社　新潮社
電話東京(34)七一一一—八番
振替　東京　八〇八番

（亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。）

印刷　三晃印刷株式會社　製本　神田藤加製本
Printed in Japan

目次

オークマ洋品店……五
女から手を引け……二四
金春横丁……四六
甘い父……六六
兄と妹……八七
渦巻模様……一一〇
街の風……一三二

タヌキ小路……一五七
美と愛……一七七
夏の落葉……二〇三
仮面と仮面……二二四
回転木馬……二三九
霧と青空……二五六

装幀　清水崑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

息子の縁談

オークマ洋品店

オークマ洋品店のショーウインドには、大熊という四角ばった漢字と OHKUMA という国籍不明のローマ字が、仲好く上下にならんで、金色に光っている。

これは親父大熊大作さんの保守主義と息子小太郎君の進歩主義が、少くとも今までのところ、上下の順を守って、平和に協調し、仲好く同居していることの告知板のように見える。

親父は五十六歳、息子二十八歳。息子としては、そろそろ親父の煙たくなる年ごろであるが、そんな気配を露ほどもショーウインドの外に現わさないのは、小太郎君の利口さであり、二階の婦人服部をすっかり息子にまかせて多くは干渉せず、息子の不満を巧みにおさえているのは、大熊さんの聰明な計算だということもできる。

「お父さん、ちょっと行ってまいります」

「どこへ？」

「三光ビルのウエリントン商会に新入荷があったそうです」

「ああ、行っといで。だが、香港物だったら、手びかえた方がいいね。密輸ものにはもうこりこりだ」

「解ってます」

かるく片手をふって、小太郎君が出て行った途端に、カウンタアのそばの電話が鳴りはじめた。

女店員がとんで来ない先に、大熊さんは気軽に手をのばして、受話器を取上げた。

「はいはい、オークマでございます。……は、栗田さま？　まいど、……あっ、先生でございましたか。これはこれは……」

大熊さんはすこしあわてた。

電話の主の栗田金平氏は、戦後は第一線をしりぞいたとはいうものの、「陰然たる勢力」という眼に見えぬ不思議な力だけは、隠匿財産のように金庫の奥に持ちつづけている財界巨頭の一人である。

その大物が自分で電話をかけて来ることは、少くともオークマ洋品店の歴史においては、稀有な出来事に属する。長い御ひいきをこうむっているが、栗田家からの電話は、いつも秘書か女中頭にかぎられていて、夫人や令嬢さえも、洋品店相手の電話口に出ることはめったにない。

「君に折入って頼みたいことがあるんだが」と電話の声は言った。「都合はどうだい？　よかったら、これからすぐに行く」

「えっ、あなたさまがこちらへ？」
「ああ、僕が行く」
「とんでもございません」
大熊さんは思わず電話にお辞儀をしてしまった。「すぐにおうかがいいたします。お宅でございましょうか、それとも？……」
「近所まで来ているんだ。五分以内に行くよ」
「いいえ、そんな……」
「いや、僕の方から出向かねばならぬ筋合の話なのだ。待っていてくれるね」
念をおして、電話は切れた。
受話器をおいた手でアゴをなでながら、大熊さんは陳列だなの間を、チョコチョコと歩いた。あわてているわけではないのだが、足がみじかいので、ゆっくり歩いているつもりでもチョコチョコ歩きになる。
「ふうーん、さては、栗田の大将、また始めたかな」

大熊大作とは、洋品店の主人にしては、すこし大げさすぎる名前である。
英語に訳せば、ビッグ・ベアー・グレート・ウワークだから、アレクサンダー大王級――とまでは行かなくとも、西部劇に出て来るインディアンの大酋長くらいの貫録はある。
ところが、御当人のビッグ・ベアー大作さんは、身長わずかに五尺二寸、体重もまた十三貫五百、万事小づくりな、小さな洋品店の小さな主人なのだから、いささか看板にいつわりありということ

になる。

我が名にこりて、大熊さんは一人息子に小太郎というけんそんした名前をつけた。ところが何の因果か、小太郎君は戦争末期の食料不足と海兵団二等水兵の耐乏生活にもかかわらず、雨後のアスパラガスのようにすくすくとのびて、身長五尺七寸、体重十七貫三百、日本人の平均水準をはるかにはね越した偉丈夫に成長してしまった。主人の善意とけんそんを無視して、看板のいつわりは、これで二重になってしまった。

店は数奇屋橋よりの銀座裏にある。この方の看板にはいつわりはない。いやしくもショーウインドと流行雑誌に関心を持つほどの淑女紳士なら、「洋品と婦人服のオークマ」の名を知らぬものはない。値段も高いが、好みも高い品をそろえた、信用のおける店だという戦前からの定評は今もなおつづいている。

栗田家へのお出入りも戦前からであった。御用は主として夫人と令嬢のお買物であったが、栗田氏自身も、秘書と大熊さんだけしか知らぬ秘密な買物を秘密なお帳面でつづけた一時期があった。

秘書から電話があると間もなく、乗り手のない高級車がオークマ洋品店のショーウインドの前に現われる。大熊さんが用意のフロシキ包をかかえて乗りこむと、車は光る風のように走って、赤坂方面の某所の、しゃれた造りの平家の裏手にとまる。勝手口から伺候すると、廊下のはずれの四畳半に、和服姿の栗田氏が大いにくつろいでいる。もちろん、一人ではない。令嬢とあまり年のちがわぬ若い小またの切れ上った女が、横っちりのあだっぽい姿でお酌している。

大熊さん持参のフランス風の「洋品」類は、この女のためのものであったが、それも戦前のことで、すでに十年以上も前の話である。戦災で赤坂のその家も焼け、戦後の追放で栗田氏の身辺から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

も脂粉の香は消え、従ってオークマ洋品店への秘密な御用も途絶えたまま今日に到っている。
そこへ思いがけない栗田氏自身の電話であったから、
「さては、大将、また始めたかな」と大熊さんがアゴをなでたのも無理はない。
栗田金平は予告のとおり、五分間以内に姿を現わした。
大熊さんはドアの外までとんで出て、今時の新興洋品店主は決して使わぬ古風なもみ手をしながら、
「いらっしゃいませ。しばらくでございます」
「やあ」
頭をさげる代りに、アゴをつき出し、肩で風をきって、さっさと店の中に入ってしまった。服装も和服に白足袋——まさしく総理大臣級の御入来ぶりであった。

栗田金平氏は大熊さんよりちょうど一まわり上だから、もう七十に近い。
だが、腰もまがっていないし、皮膚のたるみも眼立たぬ。髪の毛だけはまっ白だが、その白髪もナイロン歯ブラシのように固くてつやがある。血色のいい赤ら顔に豊かな銀髪が照りはえている姿は、白クマ、白ショージョー、鼻さえ高ければ白毛テング——少くとも老衰とは無縁の白髪に見える。五十も半ばで早くもはげ上ってしまった大熊さんの髪にくらべれば、はるかに若々しい。
背も大熊さんより少くとも五寸は高い。大熊さんはいつも小腰をかがめているし、栗田さんはそりかえっているから、二人をならべると、この差が一尺ほどにも見えるのである。
栗田氏はジロリと店内を見まわした眼で、後にしたがった大熊さんを見下して、

「君の息子はいないね。二階かい？」
「いえ、ちょっと出かけましたが、御用なら、すぐに呼びもどせます」
「居ない方がよかろう」と言って、客の相手をしている二人の店員とレジスターの少女をにらむようにながめまわして「しかし、店先では話しにくいね」
「はあ、私はどこへでもお供いたします」
「あそこは、あいてるかい？」
　栗田氏は奥の事務室のドアを眼でさした。
「はあ、あいておりますが、せまい上に、とりちらしておりますので……」
「かまわぬ。ちょっと借りよう」ドアをあけて、つかつかと歩きこみ、「なるほど、きたない部屋だね」
「はあ、あいすみません」
「そこをしめたまえ」
「はあ」
　大熊さんがかしこまってドアをしめると、栗田氏はイスにもすわらず、その場につっ立ったまま、いきなり切り出した。
「君の息子はまだ独身だったね」
「はあ、いつまでもまごまごしております」
「女はあるのだろう」
「女？」

「例えば、どこかでこっそりと同せいしているというような……」
「それもないようでございます」
「ほんとかね？」
「小太郎が何か……」
「今時の若い者は油断はならないからね。知らぬは亭主……いや、親父ばかりではないのかい？」
大熊さんはオロオロしながら、
「何か小太郎が不都合なことでも……」
「そうじゃないよ。そんなことじゃない。不都合なことはしていないかと聞いただけだ。していなければ、これに越したことはない」
「はあ？」
何のことだか、さっぱり解らない。大熊さんはネクタイの結び目に意味もなく指をかけて、栗田氏の顔を仰ぎ見た。
栗田氏はちょっと言いにくそうにしていたが、
「君は僕の娘を知っているね」
「はあ、お三人とも存じ上げておりますが……」
「三女の弓子だ。あれだけがまだ売れ残っている。どうだ、弓子を君の息子の嫁にもらってくれないか？」
寝耳に水とは、このことであろう。

大熊さんは思わず右手の人さし指を耳の穴につっこみ、まるでそこに水が入っているかのようにチョコチョコとかきまわしながら、

「何のお話でございましたでしょうか？」

御冗談でしょう、と言いたいところを、一歩引きさがって、とぼけてみせたのである。彼も銀座一流の商人だ、相手を怒らせずに、かけひきする術はちゃんと心得ている。

「君の息子の縁談だよ」

栗田氏はどうやら本気らしい。自分の娘の縁談だと言わないところは、例によって押しつけがましいが、眼の色は真剣であった。

「君は弓子を知っていると言ったね」

「はあ、よく存じあげています。……お立派なお嬢さまで……」

「たいして立派でもないが、オカチメンコというほどでもない」

どこでおぼえたのか、栗田氏は奇妙な言葉を使った。もうだいぶ前の話だが、そんな日本語がオタンコナスなどとならんで、銀座裏の酒場あたりではやったことを、大熊さんは思い出した。

「とんでもございません。もったいないほど立派なお嬢さまで」と、もみ手をしながら「しかし、どうして、手前どもの小太郎のようなものを？」

「弓子は小太郎君をよく知っているそうだ」

「ほほう」

それは知っているはずだ。弓子嬢は二階の婦人服部の常得意の一人で、小太郎君には一度ならず胸やおしりのサイズをはからせ、一度ならず生地や仕立てについて文句をつけた仲である。民主主

義の世の中であるからには、元宮家のお姫様が床屋や仕立屋の息子にほれても、別におどろくこともないはずだが、どうも、この縁談の筋は怪しい、と大熊さんは商人らしい勘をはたらかせた。ひがむわけではないのだが、なんだか最初から話がすっきりしない。第一、電話のかけ方からしてあわてていたし、いやしくも財界第一級の大物ともあろうものが、洋品店の店頭にかけこんで来て、「どうだ、うちの娘をもらってくれないか」では、売れ残りの見切品の売りこみよりも話が簡単すぎる。弓子嬢は見たところ、まだ二十四五歳のお嬢さんだから、今の結婚常識では、売れ残りとは言えない。売れ残りでもない品物を安く見切るのは、ショーウインドには出せない傷物か、それとも、早くかたづけなければ、海上保安庁かC・I・Dに没収されてしまういわくつきの密輸入品の場合にかぎる。

そんなものを引受けたのでは、「銀座のオークマ」の信用にかかわるのみか、かねがね、「傷物と密輸入品には気をつけろ」と息子に説教している親父の権威にかかわる。

息子が御大家の令嬢と良縁を結ぶことには――もしそれが良縁でありさえすれば――親父としてはすこしも反対ではないのだが、どうもこの持込み商談は一応も二応も警戒の必要がありそうだ。用心に越すものはない、と大熊さんは腹をきめた。

「おうかがいいたしますが、この縁談は――つまり小太郎の嫁になりたいというのは、お嬢さまの御意志でございましょうか？」

「うん、まあ、そんなところだ」

すこし返事が怪しくなった。

「小太郎はお嬢さまと、この店以外でも御交際願っているのでございましょうか？」

「どうだか、そいつは……小太郎君自身に聞いてみろよ。僕は知らない」

大熊さんの警戒心を、栗田氏は敏感に察したようであった。僕は知らない、と突きはなした言葉を訂正して、

「くわしい話は聞いていないが、近ごろはいろんなパーティが方々にあるね。そんなところで会っているのだろう」

ダンス・パーティ、カクテル・パーティなどと色々あるらしいが、大熊さんには縁はない。しかし、小太郎君はダンスも習っていたようだし、洋品店は根がハイカラな商売だから、銀座の「オークマ」の若旦那が派手なパーティの常連になって、御大家の令嬢と恋をささやいたとしても、親父の干渉する事柄ではないが、大熊さんはこの寝耳に水の縁談に対する既定の方針は変えないことにいるのだ」

「はあ？」

「おそくとも、内に返事がほしいね。それ以上は待てない」

「はあ、小太郎ぐに申し伝えます。お返事はその上で……」

「君自身はどう。賛成か反対か？」

お選び下さったことは、身にあまる光栄と存じまするが、昔からつり合わぬますし、本人の意志もよくたしかめねばならぬことでございますから、お返

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.